

## ■□要旨■□

## 1. 日本興業銀行時代の経験

長銀、日債銀の破綻後、自社の現状に強烈な恐怖感を覚えた。こんなことじゃまずいぞ、と心ある課長世代で集まって議論した。証券会社との業務提携を模索した際、経営企画部門に意見を具申し、自身は担当業務に邁進することが筋ではあったが、組織を超えて業務提携の仕事に関わった。ラインを守って仕事をするという組織人としての最低限のマナー、ルールを逸脱することに対して指摘も受けたが、当時も今も、やらないよりやった方が良かったと考えている。

(体得した経験知)

- ・大変革時代には、古典的でオーソドックスな社員より、言動その他に若干難があっても、何かやっけてのける人間の方が重用される。物事を成し遂げる最後のところの絶対的なパワー、執着心が何事にも必要。
- ・自分のやりたいことをやるには、ある程度の地位と権限が必要。しかしながら、大企業の中で地位と権限を得ることは困難を伴う。既存の大企業で上り詰めていくには、多少の立ち回りの知恵も必要。ただし、出世が手段なのか目的なのか、見誤ってはならない。

## 2. ユニゾン・キャピタルでの経験も踏まえたミドル論

・ミドルは野球に例えると監督兼 エースピッチャー 兼 4番バッター 兼 二軍監督、という役割。課長というポジションがあり、人材がいることが日本企業の強み。しかし、日本企業の不思議な点は、課長たちがその後、普通の人になってしまうこと。夢があって何事にもポジティブであったのに、保守化して情熱を失ってしまう人が多い。

・これからどうしたらいいのかという答えは大抵、会社の中にある。外部の人間からアイデアを聞いて目から鱗が落ちるといことはほとんどない。会社の中にある知恵を集めてイノベーションにつなげる人材、解決プランを具体化してみんなをその気にさせるプロデューサーが社内にはいなければならない。

・マネジメントはきちんとしたインフラがあり、ある程度の権限委譲がなされている大企業のほうがやりやすい。大企業には権限をマネージして結果を出すという面白さがある。一方で、事業家には大企業ではなかなか経験できない、自分の責任で事業をやるという喜びがある。どちらが良いということではなく、双方に面白さがある。

## 3. サラリーマン人生の経験から塾生に伝えたいこと

・とにかく能動的にチャレンジすることが大切。チャレンジせずに終わってしまうことは勿体ない。組織におけるルールの範囲を少し踏み越えるくらいなら、結果的にそんなに損はしない。自分で決めた目標に向けて何をすべきか、考えること。

・サラリーマンとして社長になれるかどうかは、実力も必要だが最後は時の運。それだけで人生の成否は決まらない。大切なのは本物のリーダーやプロデューサーになること。

## ■□今回の学び ひとことでいうと■□

変革の意欲を持ち、出過ぎた杭になれ！



## ■□感想■□

自らジェットコースターと例えられた銀行員生活のご経験を、淡々と語られていたことが印象的でした。その語り口調とは対照的に、チャレンジを続けていく姿勢、私たち塾生へのメッセージが強く伝わってきた講義でした。